

## 第 142 回大会

2011 年 6 月 18 日 (土) ・ 19 日 (日) , 日本大学文理学部キャンパス  
口頭発表, ポスター発表, ワークショップ要旨

### The 142nd Meeting of LSJ

Nihon University, College of Humanities and Sciences, 18-19 June, 2011

Abstracts of oral presentation, poster presentation, and workshops

《口頭発表 Oral Presentations》

#### DP 内における形容詞句の構造的位罫に関して

森田 千草

Cinque (2010)は、名詞を修飾する形容詞には、直接修飾ソースと(縮約)関係詞節((Red)RC)ソースの 2 種類のソースがあることを提案している。本発表では直接修飾ソースを持つ形容詞に焦点を当て、以下の 2 つのことを提案する。まず、直接修飾形容詞を導入するための機能範疇が DP 内に少なくとも 2 種類存在することを提案する。ひとつは Attr(ibutive)P(hrase)であり、もうひとつは AttrP よりも構造的に高い位罫に生起する D(irect)Mod(ification)P(hrase)である。次に、直接修飾ソース形容詞の意味クラス群は、その統語的、形態的な振る舞いから 3 つに大別され、それぞれ異なる位罫に生起することを提案する。AttrP の指定部に導入される意味クラス群、DModP の指定部に生起する形容詞の意味クラス群、さらにその両方に生起する修飾要素の意味クラス群の 3 種類である。

#### 英語の不定詞関係節の派生について

西前 明

Chomsky and Lasnik (1977) は英語の不定詞関係節の現象を、特定の記号列を排除する独立したフィルターによって処理した。これに対し Hasegawa (1998) は、できる限りその種のフィルターに頼らず、関係節の派生に関わる規則の中に非文法的な構造を排除する仕組みを組み込んだ。本発表では、Hasegawa の、フィルターに頼らないという方針に従う一方で、Hasegawa の分析の問題点を指摘し、Chomsky (2008) のミニマリストの枠組みでその問題点を解消する代案を構築する。顕在的 *wh* 関係詞が生起できるのは前置詞を随伴する場合に限られるという点 (*\*a knife which to chop tree limbs with/a knife with which to chop tree limbs*) , および、「for+慣用句要素/虚辞」を含む例の非文法性 (*\*an opportunity for advantage to be taken off/\*some books for there to be in the library*) について特に論じる。次の二つの仮説が中心的役割を担う: 1) 不定詞関係節は p\*P である; 2) 空演算子は選択的に複数の格素性を持つ。

## 長距離再帰形の移動分析と命題態度の意味論への帰結

伊藤 祐輝

Ito(2010)による長距離再帰形の空演算子移動分析に基づき、長距離再帰形の *de se* 解釈は空演算子の移動と再帰代名詞の課す意味条件から生じると主張する。具体的には、(i)空演算子の移動が個体変項をもつラムダ抽象をつくり、演算子が局所的に主語に束縛されることにより変項の値を与える、(ii)再帰代名詞は態度保持者が 1/2 人称の思想を持つという意味条件を課す、と論じる。さらに中国語の阻害効果に関する帰結を述べ、統語と談話のインターフェイスが Cyclic Spell-Out のダイナミクスに支配されていることを示唆する。

## Subject/object asymmetries and chain formation in Selayarese

Hideki MAKI, Hasan BASARI

This paper points out two subject/object asymmetries in Selayarese, and investigates the chain formation mechanism in the language. The first asymmetry is that object wh-movement induces deletion of the agreement suffix *i* '3' on the verb, while subject wh-movement does not induce deletion of the suffix in the same clause. The second asymmetry is that while the fronted object does not block movement of a wh-phrase across it, the fronted subject does. We propose that while the object wh-phrase is base-generated in the object position, the subject wh-phrase is base-generated in CP SPEC of the clause from which its resumptive pronoun counterpart originates, and show that this claim provides a uniform account for the two subject/object asymmetries.

## 統辞構造の再帰的計算に選択的な言語野の活動

太田 真理, 福井 直樹, 酒井 邦嘉

ナンセンス語と日本語の助詞・活用語尾で構成されたジャバウォッキー文と、構造も意味も持たない文字列を直接比較する実験パラダイムを用いた fMRI 実験により言語野の活動を調べた。文条件 (1) 埋め込み文条件（「太郎が花子が歌うと思う」）、(2) 単文条件（「太郎の兄が歌い始める」）、文字列条件 (3) 対応付けの順序が前半 (A) と後半 (B) で逆の文字列 ( $A_2A_1B_1B_2$ , 数字は対応付けの順序を表す)、(4) 前半と後半で同じ文字列 ( $A_1A_2B_1B_2$ ) を実験条件とした。(1)–(2) と (3)–(4) の脳活動を直接比較した結果、左下前頭回と左縁上回に有意な活動が見られ、この活動は再帰的計算の度数を測る「埋め込み度数」で説明可能であったが、「メモリースパン」や「要素の数え上げ」では説明できなかった。以上より、統辞構造の再帰的計算が言語野の活動を選択的に変化させることが明らかになった。

## 周縁部現象としての軽動詞構文の考察

小林 ゆきの

本発表では、フェイズ理論の枠組み (Chomsky 2008) のもと、いわゆる日本語軽動詞構文の大目的語分析を提案する。日本語軽動詞構文は、Verbal Noun (VN) の項が VN の投射の外に出られるという特徴を持つ。Grimshaw and Mester 1988 以降、VN が非頭在部門で「する」に上昇するという述部移動分析 (Saito and Hoshi 1994/2000 他) や、VN の項自体が同投射内から繰り上がっているとする項移動分析 (Hiraiwa 2005 他) が提案されてきた。本発表では、新しいデータをもとに、これらの移動を用いた分析には問題があることを指摘し、代案として、問題となる VN の項がフェイズ周縁部に大目的語として基底生成しているとする分析を提案する。ここで、CP, vP に加え nP をフェイズと考えることで (Fukui and Zushi 2008, Chomsky 2007 他) 日本語のいわゆる目的語繰り上げ構文、主格目的語構文、軽動詞構文を、それぞれ各フェイズ周縁部に大目的語が基底生成している現象として並行的に捉えられる可能性を指摘する (cf. Hoji 1991, Takano 2003)。

## 再帰形「自ら」に関する一考察

トルヒナ・アンナ

従来、日本語の再帰形は「自分」であるとみなされ、「自分」と英語などの再帰形の同異が論じられてきたが、日本語には「自分」の他にいくつかの再帰形がある。本発表では、「自ら」という再帰形の機能について考察する。「自ら」は、その節内で束縛されなければならない、「well-behaved anaphor」であるとされている (Kitagawa(1994))。しかし、「自ら」は「自分」と同様に照応形がそもそも生起できない主語の位置に現れることがあるため、「自ら」は純粋な照応形であるとは言えない。

本発表では、「自ら」の機能を次の三つに分類する。

- ① 副詞： 「身の安全は自ら守る。」
- ② 取り立て詞相当句： 「経営者トップ自らが個人情報に取り組む。」
- ③ 名詞相当句： 「花子は自らを責める。」

名詞相当句の「自ら」は単独で項として機能するのではなく、空範疇と結合し、その結合の中で、音形のない名詞句から「自ら」への項の位置の移動が起きていると主張する。

## The 13th Stroke Boundary: Effects of visual complexity for Japanese kanji processing with high and low frequencies

Katsuo Tamaoka, Sachiko Kiyama

Kaiho (1979) explained that difficulty in kanji processing is proportional to stroke count for kanji of up to 13 strokes, but after 13, the greater number of strokes facilitates kanji processing. The present study investigated the effects of visual complexity for kanji processing by selecting target kanji from different stroke ranges of visually simple (2-6 strokes), medium (8-12 strokes) and complex (14-20 strokes) with high and low kanji frequencies. A lexical decision task was

administered to 42 native Japanese speakers. The results showed that the effects of visual complexity changed depending upon kanji frequency. In high frequency, kanji with medium complexity were processed faster than complex kanji. In low frequency, visual complexity inhibited speed and accuracy of kanji processing. The present study did not support Kaiho's assumption. Rather, visually complex kanji with low frequency require heavier cognitive loads for kanji processing, whereas medium-complex kanji with high frequency showed faster speed even though many kanji exist in this stroke range.

## 日本語における再文法化について—複合助詞を中心に—

劉洪岩

文法化研究において、再文法化 (regrammaticalization) は一方向性の論争の焦点として提案された。再文法化はすでに文法化した文法項目がいかんして変化するか、そしてこの変化が一方向性の過程であるかという問題をめぐって議論されてきた (Greenberg 1991, Allen 1995, Vincent 1995, Ramat 1998)。従来の日本語の文法化研究は、主に内容語が機能辞に変化する一方向性を論証してきたが (Ohori 1998, 大堀 2002, 日野 2002, 青木 2007), 機能辞としてどのようなメカニズムによって、どのように再文法化するかという問題が依然残っている。発表者は日本語における再文法化の現象とその特徴, 及び一方向性との関係を明らかにしたい。再文法化は文法化の後段階に生じ, 機能辞の複合化による新たな再分析がなされ, 機能が再調整される類推の文法変化である。この一連の変化過程は一方向性に反する過程ではなく, 文法化が生じた項目がさらに一層文法化する過程と見ることができる。

## ヲ格名詞句をとる自動詞文について

安原正貴

本発表では「与太郎が口をあいて寝ている」や「犬がしっぽをたれて歩いている」(須賀(1981))などの文を扱い、これらはなぜ自動詞でありながらヲ格名詞句を伴えるのかという疑問に対して説明を与える。具体的には、これらは付帯状況を表す副詞節という構文的環境によって認可されると主張する。従来、ヲ格名詞句を伴える形容詞は好悪・欲求を表すものだけであると指摘されてきたが(水谷(1964))、実際は付帯状況を表す副詞節に生じた場合、「太郎は声を大きく叫んだ」のように、その他の形容詞もヲ格名詞句を伴うことができる。また、自動詞は「た」や「ている」をつけて「あいた口」や「たれたしっぽ」のように形容詞的な働きをすることができる(金田一(1976))。付帯状況を表す副詞節という構文的環境及び自動詞・形容詞の密接な関係性にに基づき、ヲ格名詞句を伴う自動詞文は付帯状況を表す副詞節により構文的に認可されると主張する。

## 「～ノコト目的語」における介在可能なコトの分析

湯本 かほり

本発表では、「太郎が花子ノコトを愛している。」や「太郎が花子ノコトを殴った。」のように、「感情述語」や「X動詞（「非接触」「知覚」「接触」などのその他の動詞）」の目的語の位置に任意に現れるコトが、前接名詞の意味的制約や統語的制約を示す理由について考察し、以下の三点を主張する。

- ①ノコト目的語の出現には、前接名詞の特定性よりも有生性が強く働いている。
- ②従来言われている受動文の主語とならないことの他に、ノコト目的語が連体修飾節の底名詞になれないこと、分裂文の焦点部分に現れないことから、ノコト目的語は表層上の目的語の位置にしか現れない。
- ③上記①②により、「感情述語」や「X動詞」における介在可能な「（ノ）コト」は有生名詞を「非有生化」させる機能を有すると言える。

## 同時的時間関係を表すタクシスの<e iss->

金京愛

現代韓国語には<ko iss->と<e iss->という二種の状態形形式があり、意味的には日本語の「-ている」にほぼ相当する。特に<e iss->は「倒れる、壊れる」などの状態変化自動詞に後接して結果状態を表すが、動詞によっては日本語では「-ている」が後接できても韓国語では<e iss->は後接できず、変化後の状態を表すのに過去形<ess->を用いる場合がある（salaci-ta「消える」、kelhonha-ta「結婚する」など）。ところが「ある日起きてみると」「私が会った時には」などのような設定時点（reference time）を導入するなどの環境においては、これらの動詞にも<e iss->が後接できる場合がある。本発表では、この場合に用いられる<e iss->は複数の出来事間の（同時的）時間関係を表すタクシスの機能をもつ形式であると主張し、その出現条件について特定する。

## 韓国語の「KES-ITA」文について－「KES」の意味拡張を中心に－

李英蘭

韓国語の文末に現れる「-N KES-ITA(以下、KES-ITA)」は、「形式名詞＋指定詞」という形態的特徴から日本語の「のだ」との対照研究がしばしば行われているが、意味的特徴から見ると「ものだ」「ことだ」「わけだ」まで幅広く用いられる表現である。本発表では、多様な意味を持つ「KES-ITA」の本質を探るため、会話文を中心にその意味・機能を文法化の観点から考察する。特に、「KES-ITA」は、具体的なものを指し示していた「KES」の指示対象の漂白化によって<指示>から<名詞化>の機能へ変化した後、話し手の推論による語用論的強化に動機づけられ、ある二つの事態を何らかの関係で結びつける<関連づけ>の働きへと拡張したとことを示す。こうした「KES-ITA」は「語彙領域」から「文法領域」へ、「客観的な事態」から「主観的な態度」を表すものに変化してきたと考えられる。

## 日本語児による度量句の解釈

有井 巴

本発表では、日本語児（10名の5～6歳児（平均6歳0ヵ月））が(1a)の比較構文を絶対的に（このビルの高さは20メートルだ）解釈することを示す実験を報告し、それは日本語児が(1a)を(1b)のような構文として解釈するために生じることを論じる。

- (1) a. このビルは20メートル高い。  
b. このビルは高さ<sub>i</sub>20メートル  $t_i$  だ。  
c. This building is 20 meters tall.

Watanabe (to appear)は、(1b)における「高さ」は形容詞として機能し、(1b)は英語の(1c)に対応する構文だとしている。(1b)では形容詞が度量句の下から移動する（AP-movement）のに対し、(1c)にはそのような移動はない。これをふまえると、日本語児は(1b)の構文において AP-movement を任意に許し、(1b)と表層構造が同じになる(1a)を絶対的に解釈してしまうと考える。

## サハ語（ヤクート語）の統語的派生と脱範疇化

江畑 冬生

サハ語の派生接辞はその形態統語的ふるまいから2種類に分けることができる。そのうちの1つである統語的派生接辞は、複数接辞に後続したり、動詞の対格名詞句を保持したままの派生を許すことから、一般言語学的に言う「派生」とは異なる特徴を示すと言える。このような統語的派生の特異性は、品詞を変える派生における脱範疇化と再範疇化とが相互に独立でありかつ段階的であるというという考えにより解決することが可能である。すなわち、統語的派生においては脱範疇化の度合いが語彙的派生とは異なり、元の品詞の文法範疇を部分的に保存するのだと結論付ける。さらに本発表では、音韻および形態統語法において、統語的派生が語彙的派生とは相違点を示す一方、屈折とは体系的な共通性を示すと主張する。サハ語の事実からは、派生と屈折とを単純に二分できないことが示唆される。

## シベ語の補助動詞 senda- と se- について

児倉 徳和

本発表ではシベ語（満洲＝ツングース諸語）の補助動詞 senda-「放す、置く」と se-「言う」の2つの補助動詞の機能を対比しつつ論じる。まず、senda- は「（本来事態の生起に対してコントロールを持つはずの）話し手の意図に抛らずに生起した事態」を表わすのに対し、se-「言う」は「事態の生起に対する主語の働きかけ」のみを表わし、事態が実際に生起したことを含意しないことを指摘する。そしてこれら2つの補助動詞の機能の関係を、DeLancey(1984)の提示する事態の内的プロセスを意図的な働きかけと事態の生起に分けるという事象モデルに基づき、se- は事態を構成する2つの内的プロセスのうち、前者のプロセスのみを表わし、senda-は後者のプロセスのみを表わすとした。このことから、補助

動詞 *senda-* と *se-* の機能は事象モデルの異なる局面を表わす点でアスペクトの観点から関係付けが可能である。

## グルジア語の使役動詞における目的語標示

児島 康宏

グルジア語では、動詞が直接目的語か間接目的語のどちらかの人称（と部分的に数）を標示する。直接目的語と間接目的語の両方があれば、原則として動詞は間接目的語を標示する。しかし、間接目的語が3人称の場合、動詞が間接目的語ではなく直接目的語を標示することがある。本発表では、標示される目的語の選択に被使役者性が関与することを指摘した。すなわち、動詞が使役的な意味を含む場合、被使役者を表す目的語が優先して動詞に標示される。被使役者が間接目的語であれば、動詞は直接目的語を標示できない。一方、被使役者が直接目的語であれば、それが3人称でない限り（3人称の直接目的語はもともと動詞に標示されない）動詞が間接目的語を標示するのは意味的に不自然と判断される。動詞に標示されない1・2人称の直接目的語は形式上3人称化されるが、直接目的語が被使役者を表す場合には3人称化は起こりにくい。

## ブヌン語の「品詞分類」を再考するー特に「形容詞」の位置づけについてー

野島 本泰

ブヌン語（台湾、オーストロネシア語族）の形容詞の扱いには先行研究で次の2つの立場がある：(A)動詞の下位類（状態動詞）と考える立場。(B)動詞とも名詞とも異なる独立した品詞だと考える立場。本発表では、ブヌン語の形容詞について、統語的には動詞からも名詞からも区別するのが難しいことなどを認めた上で、形態的にはむしろ名詞により近い存在とみなす。その証拠として以下の事実を挙げる：(a)動詞は過去あるいは完了を標示する接頭辞 *<in>* をとる。(b)動詞はボイスの交替を示す。(c)動詞は相互を表す接頭辞 *pa-* をとる。形容詞・名詞は「元々...だった」を表す接頭辞 *mai-* をとる。(e)形容詞・名詞は「...になる」を表す接頭辞 *min-* をとる。(f)動詞は使役を表す接頭辞 *pa-* をとる。形容詞、および名詞の一部は、使役を表す接頭辞 *pi-* または *pin-* をとる。

## 南琉球八重山波照間方言における焦点標識および主題標識の機能と分布

麻生 玲子

本発表では、南琉球八重山波照間方言における焦点標識 (=ndu, =ru) および主題標識 (=ja) の機能と分布について考察する。これまでの先行研究においては、例えば焦点標識に関して言えば「取り立てて強調する」、「焦点を当てる」といった記述にとどまり、具体的な機能の提示はされていない。主題標識についても同様のことが言える。本発表では発表者が自ら得た談話データを基に、文法関係、情報構造の性質、および referentiality に関して分析を行った。その結果、焦点標識は、話し手が想定する聞

き手の知識が「全く知らない」あるいは「全く反対の知識を持っている」場合の広い意味での「新情報」を示す機能があることがわかった。一方、主題標識は、すでに話し手と聞き手が共有している「旧情報」を示し、列挙、対照の機能の他、特に談話においては登場人物のトラッキングの機能があると結論付けた。

## 日本手話の移動表現

神庭 真理子

日本手話は、日本のろう者コミュニティで使用されている自然言語である。日本手話の単語は、手の形・手の動き・手の位置の3つの音韻的要素から成る。

本発表では、日本手話において有生物の移動表現（乗り物による移動を含む）がどのように表されるのか、3つの要素のうち手の動きに注目して述べる。移動表現は、類像性 (iconicity) が特に高い形式（CL 構文 classifier construction）が見られることで知られる。しかし、移動表現に用いられる CL 構文のうち、(i) 山型に弧を描くアーチ型、(ii) 真っすぐに動く直線型、そして (iii) 左右または上下に小刻みに揺れるジグザグ型には、手の動きの類像性が低い用例がある。

3つの手の動きの様々な用例を比較することにより、CL 構文について指摘されてきた類像性の高い解釈の他に、より抽象化された解釈が存在することと、その抽象化された解釈は、類像性の高い解釈から拡張されたものと見なせることを主張する。

## スリランカ手話における否定マーカー

加納 満

手話言語は手指動作と非手指動作の継起的・同時的組み合わせによりコード化する視覚空間言語である。否定も同様に手指動作と非手指動作によって表される。本発表では、スリランカ手話 (SLSL) の否定形式の分布と意味機能、否定形式の接語化現象、手指否定形式同士の共起関係、手指否定形式と非手指否定形式の共起関係を分析し、SLSL の手話類型論上の位置づけを試みる。

SLSL の手話類型論的特徴として、1) 否定形式が通言語的な形式的特徴を有していてもその意味機能の現れが異なること、2) SLSL は否定接辞がないが否定辞の接語化現象が認められるタイプの言語であること、3) 手指否定形式と非手指否定形式の呼応が一般的であるが SLSL は手指否定形式同士の呼応も可能な言語であること、4) 否定に関して非手指優位型の手話言語が多いが SLSL は手指優位型言語であることを指摘する。

## 複合動詞とヴォイス辞がからむ語順変異 —「監督が選手たちを {競争し合わせる～競争させ合う}。」—

山部 順治

本発表では、複合動詞の分類とヴォイス辞との語順に関して、変異の存在を指摘し、同現象の輪郭を記述する。例は(1)。

(1) ○○監督が選手たちを競争 {し合わせる～させ合う}。

当該の変異は、次のようだ。(複合動詞(前要素-後要素)を V1-V2, ヴォイス辞を s と表記。)複合動詞の使役の意味〈(V1-V2) -s〉を表す形式として、規範的な /V1-V2-s/ (語順 A) だけでなく、非規範的な /V1-s-V2/ (語順 B) が観察される。受身「られ」の例(2)。

(2) この点が確認 {し合われる～され合う}。

V1については、サ変動詞の場合(1)のほうが、その他の動詞の場合(3)より、語順 B の定着度が高い。

(3) 競い合わせる～競わせ合う。

V2 については、「合う」の他、次が同変異に関与する: 「忘れる」(例(4)) 「切る」 「終える」 「直す」 「返す」 「尽くす」 「損ねる」。

(4) 配達 {し忘れられる～され忘れる}。

## ホカとシカの意味特質と統語的条件

片岡 喜代子, 宮地 朝子

本研究は、X のホカ/X シカの意味特質として、(i)両者共通して、ある集合を X と X 以外の下位集合に分ける、(ii)シカは、X にある命題(特質)の成立を、X 以外にはその命題の不成立を要求する、(iii)ホカは、X, X 以外に対し関連命題の成立・不成立は要求せず**保留**することを提案する。その結果、「太郎しか来なかった/太郎のほか来なかった/太郎のほか花子が来なかった」のように、シカは否定が必須で除外解釈のみ許す。一方ホカは同じ命題が成立するメンバーが他方の集合にいないければ除外解釈を与え、いけば累加となり、また否定がなくても生起可能である。項的にも付加句的にも働き、量化詞同様浮遊もするという、両者の統語的共通点や、他の相違点も、この語彙特質から導かれ、更に日本語の構造特質も関って現象面に現れることを論ずる。

## 副詞との共起性から見た日本語関係節における「が・の」交替

赤楚 治之, 原口 智子

日本語の関係節に見られる「が・の」交替が持つ複雑さのひとつに Nakai(1980)が指摘した副詞の問題が挙げられる。(1)に見られるように、副詞が属格主語よりも左側に位置することが見られることから、属格主語が関係節内部に留まっていることを示す重要な証拠として取り上げられてきた。

(1) 昨日 太郎がの 食べた 料理

しかしながら、副詞によってはそのような分布を示さないものがあるということが、次のようなデータによって観察される。

- (2) a. 筆で太郎が/\*の 書いた手紙  
b. 裸のまま太郎が/\*の 踊ったダンス

この事実は単に主語の格交替をとらえようとしてきたメカニズムではとらえきれない性質のものである。本発表では、このような副詞の分布は、属格主語を持つ関係節には Focus Phrase がないとする赤楚 & 原口(2010)と、scrambling は C にある focus が T に継承されることによって誘発されるとする Miyagawa(2007)から、v によって認可される(2)のような副詞が scrambling できないことで導き出せることを論じる。

## 現代日本語における否定と呼応する類義副詞の使い分けの試論 —コーパスを用いて「まったく・ぜんぜん・すこしも・ちっとも」を例に—

劉時珍

本発表はコーパスを用い、類義性の高い全部否定の陳述副詞「まったく」「ぜんぜん」「すこしも」「ちっとも」の四つの使い分けを明らかにすることを目的とする。分析の観点として、①述語の分布の偏り、②ジャンルの偏りの2点に注目する。方法として、均衡コーパス(BCCWJ)を用い、順序尺度で同じ基準を持つ4つの副詞を点数化し、その違いを可視化する作業を行った。本発表で、その中でも違いが顕著に見られた、それぞれの副詞と呼応する述語の分布、および、出現したジャンルを集計した結果を考察対象にしている。調査の結果、「まったく」と「ぜんぜん」、および「すこしも」と「ちっとも」にそれぞれ似た傾向が見られ、異なるジャンルにおける硬い表現・軟らかい表現の対になっている傾向が観察された。本発表では、上記の考察から、この四つの副詞がそれぞれ微妙に意味・用法が異なり、ジャンルや使用場面によって相補的な分布をなす様子を詳しく示す。

## 「～ていく/くる」と「-e kata/ota」に関する一考察 —移動を表す用法を中心に—

韓京娥

本発表では、移動の方向を表す動詞と結合している「ていく/くる」と「e kata/ota」の用法の中で、話し手の移動を対象にし、「ていく/くる」「e kata/ota」の意味機能の違いと事態把握の違いを関連付けて考察する。日本語の「ていく」は、移動の(方向や)過程を表すのに対し、「てくる」は、移動という出来事が起こっても移動に焦点が置かれずと文に明示されない。一方、韓国語の「e kata/ota」は、共に移動が行われれば使用可能で、「e kata」は移動の出発点を表し、「e ota」は到着点を表す。このような両言語の違いは、テキストにおける視点の結束性にも大きく影響を及ぼす。さらに、テキストの中のイマ・ココは、日本語では「ていく」で表せるが、韓国語では「e ota」で表され、<自己・中心的>なスタンスの<主観的把握>(池上2006など)にも大きな違いがあると考えられる。

## 奄美語湯湾方言における喉頭化共鳴子音の音響特徴

新永 悠人, 青井 隼人

本研究の目的は、奄美語における喉頭化共鳴子音 /<sup>h</sup>m, <sup>h</sup>n, <sup>h</sup>w, <sup>h</sup>j/ の言語音声学的に重要な音声特徴を音響分析に基づいて記述することである。

奄美語は、鼻子音・接近音において喉頭化・非喉頭化の2系列の対立が存在することが知られている。ところが、どのような音声的特徴によって喉頭化音と非喉頭化音が区別されているのかを明らかにするための音声学的調査はこれまでに実施されていない。また、喉頭化鼻子音は言語横断的に見て出現頻度が低く、その音声実現が示す変異の範囲を知るための資料も乏しい。

観察の結果、非喉頭化共鳴子音に対して喉頭化共鳴子音は以下の音響特徴を持つことが明らかとなった。(i) 狭めの時間が比較的短い、(ii) 比較的急激な開始部をもつ。以上の音響特徴は、非喉頭化共鳴子音との聴覚的な区別のための重要な鍵になっていると推測され、喉頭化共鳴子音 /<sup>h</sup>m, <sup>h</sup>n, <sup>h</sup>w, <sup>h</sup>j/ が共通にもつ「強い声立て (hard onset)」という聴覚的特徴に関与していると考えられる。

### 再試行を表す複合動詞「～直す」の語形成 —語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性—

陳 劭暉

本発表は再試行を表す複合動詞「～直す」の語形成を分析する。

「～直す」は直接受身ができる特殊な統語的複合動詞とされているが、「\*CD が聞き直される」のように、受身ができない場合がある。本発表は、本動詞「直す」が「対象の主体役割を繰り返すことで対象を修正する」という LCS を持ち、「～直す」は V1 と対象の主体役割との一致により、「V1 を繰り返すことで対象を修正する」という補文構造（語彙的複合動詞）の LCS に派生すると考える。また、この LCS が更に、自由に V1 を補文に取れる構造（統語的複合動詞）に派生する。上の派生が進むほど、「～直す」の受身形の文法性が下がっていく。その原因は「～直す」の意味が「繰り返し」に特化し、修正の対象が抑制されるからである。つまり、「～直す」には語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2種類がある。

この結論は従来区別されてきた語彙的複合動詞と統語的複合動詞を連続体として分析できる可能性を示唆する。

### 依頼における「けど」で終わる言いさし文に関する考察—ポライトネス理論を軸に—

白田 泰如

本研究では、「～していただきたいんですけど」のような、文を最後まで言い切らない「言いさし文」形式の依頼表現について、ポライトネスの観点から考察する。同表現に関する質問紙調査の結果、「言い切り文」に比べて依頼表現としての自然さはやや下がることがわかった。また用例を検討した結

果、いくつかの特徴的な示唆が得られた。以下の用例は、「言いさし」の依頼が出現しやすいと考えられる環境である。

- ・頼みにくい相手に頼みにくいことを頼む場合  
いや、ちょっと外まで来てほしいんですけど（仲の良くない先輩に対して、寒い日に）
- ・依頼内容が「情報提供」である場合  
ひとつききたいことがあるんだけど。
- ・客→店員のような、依頼の当然性が極めて高い場合  
試し書きしたいんですけど。

### ソ系の直示用法の派生過程について—間主観化による説明の試み—

平田 未季

本発表の目的は、日本語指示詞ソ系の直示用法は「中距離指示」を原型とし、そこから「聞き手領域指示」が派生したという仮説を支持する2つの証拠を示すことである。第一に、間主観化に基づく理論的証拠を論じる。話し手を中心に概念化された「中距離指示」が聞き手への配慮から「聞き手領域指示」と再解釈されたという本発表の仮説は、Traugott (2003)が提示した間主観化という意味変化の一方方向性仮説の一事例と考えられる。第二に、ティリヨ語(Tiriyó)指示詞の用法発達に基づく、間接的ではあるが経験的証拠を示す。Meira (2003)はティリヨ語指示詞の観察から、「中距離指示」形式は、発話場面で顕現性を持つ「聞き手」の位置を意味化し、「聞き手領域指示」形式へと発達すると主張した。この主張は本発表が仮定するソ系の意味変化と同じ過程が独立に存在することを示しており、指示詞では「中距離指示」から「聞き手領域指示」への意味変化が通言語的な傾向であることを示唆している。

### ジンポー語ミッチーナ方言における出動名詞について—重複によるものを中心に—

大西 秀幸

ジンポー語ミッチーナ方言(以下ジンポー語)には動詞類から他の語類へ派生する形態的手法として名詞化接頭辞 *A\_* の添加、重複の2つの手法がある。本発表では重複に焦点を当て、重複によりできた動詞重複語がどの語類の下位範疇にあるのかということを論じる。

動詞重複語の特徴としては①動詞を修飾する、が挙げられる。よって動詞重複語は、重複を形態的特徴として、副詞類の1部を構成するとも考えられる。しかし調査によって軽動詞 *re33*「なる」と高い割合で結びつくことなどが明らかになり、他の特徴②否定形式が名詞文と同じ③機能動詞結合を生む、を新たに確認できた。このことから発表者は、動詞重複語が寧ろ名詞類の下位範疇にあるという結論を出した。このように考えることでジンポー語の動詞類からの派生が基本的に名詞類へ向かってしか起こらない(動詞は派生によって出動名詞を生む)という体系的且つ簡略に説明できるメリットも生まれる。

## 中国語受身マーカー文法化分析の新視点—「着点動作主動詞」から受身マーカーへ—

夏海燕

中国語では、上代から現代にいたるまで、「被 bei<被る>」を初め、「見 jian<見る>」、「吃 chi <食べる>」、「着 zhuo<着る>」など、元々動詞のカテゴリーに属するものが受身マーカーとしての機能をはたすようになった。本研究では、「着点動作主動詞」という新たな立場からこれらの動詞が受身マーカーへの文法化を全体的に説明することを目的とする。

一見関連性のない「被」、「見」、「吃」、「着」などは本動詞の時、全て「着点動作主動詞」に属する。「着点動作主動詞」とは、基本義の時〈動作主が対象に働きかけ、動作主の身体、または領域を着点に物事を移動させ、動作主が動作の影響をうける〉という〈主語への求心性〉の意味を備えている動詞のことである。

本研究では、「動作主への求心性」、「動作主の受影 (affected agent)」及び「被害性の伝達」という3点が「着点動作主動詞」が受身マーカーまたは受身マーカー相当の働きを担うようになった重要な原因だと考える。

## 古代ギリシア語における倚辞のトーンについて

齋藤有哉

本発表では、古代ギリシア語（特にコイネー）を扱う。この言語のプロソディは、従来1語のうちで1モーラが高ピッチで卓立するピッチアクセントであると言われながらも、ストレスアクセントの言語と同様の体系が想定されるなど、十分に統一的な説明が与えられてこなかった。動詞の定形などは語末から数えて一定の位置に高ピッチが実現することが知られていたが、語声調言語であるとみなすことによってこれらを含めさらに多くの語形が説明可能である。その例として古代ギリシア語の倚辞のピッチパターン、すなわち倚辞に対してなされたピッチ指定である高トーンが、ホストの語において実現するという現象を取り上げる。語末からのピッチパターンが固定されているというこの解釈によれば、自立語と付属語の間にトーンの結び付け方の違いがあるという、音韻語の定義から自動的に導かれるきわめて一般的な制約だけで十分に説明可能である。

## ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言の複合語アクセント再考 —三要素からなる複合語を中心に—

三村 竜之

Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には高平調（アクセント 1, Acc1）と下降調（Acc2）のいずれかが現れる。二要素からなる複合語の強勢の型と音調の別に関しては既に私見を述べたが、未解決の問題点も残る。そこで本発表では、三要素からなる複合語の資料を基に拙論の問題点を解決し、改めて Sandnes 方言の複合語アクセントが全て規則により導かれることを主張する。

本発表の概要は以下の通り: (1) 左端の要素本来の主強勢が複合語全体の主強勢となる; (2) 内部構造が [A [BC]] で前部要素 (A) が一音節語であれば複合語全体の音調は Acc2 となるが, その他の場合は前部要素本来の音調が複合語全体の音調となる; (3) 内部構造が [[AB] C] の場合, 前/後部要素の間に結合要素 -s- が介することがあるが, この場合は前部要素 (AB) の音調が複合語全体の音調となる。なお, これは, 拙論における「-s-は複合語全体の音調を Acc1 とする」という主張を修正するものである。

## Cantonese Loanwords: Conflicting VC Rime Constraints

Michael Kenstowicz

This paper investigates how English loanwords conform to three VC rime constraints in Cantonese. Our data is drawn primarily from Chan & Kwok (1982) and Bauer & Benedict (1997). First baseline correspondences are established between English and Cantonese vowels and coda consonants. We then turn to adaptations in the face of i) a ban on front nonhigh vowels and anterior consonants (\*ET), ii) a ban on high vowels and velar codas (\*IK), and iii) \*OP that blocks round vowels and labial codas. We find that either the vowel or the coda consonant changes to conform to the constraint. Also, Yip's (2006) prosody > vowel quality > duration hierarchy is amplified to prosody > back > high > ATR > duration.

## The Yanbian variety of Korean: A living fossil connecting the missing link between Korean and Japanese

Yin-Ji Jin, Hideki Maki

Jin (2010) points out that genitive subject is impossible in modern Korean. On the other hand, in the history of the Japanese language, genitive subject has been possible. However, as these two languages belong to the Altaic language family, and should have sprung from the common proto-Altaic language, it seems natural to assume that the proto-Altaic language should have had genitive subject, and for some reason, only the Korean language ceased to have it. In the present research, we did discover genuine genitive subject in a variety of the Korean language presently spoken in the Yanbian district of China, which contributes to connecting the missing link between Korean and Japanese with respect to genitive subject, functioning as a living fossil.

## アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞

熊切拓

本発表において取り上げるのは, アラビア語チュニス方言における前置詞 *fii- / f-* 「への中に」が, 他動詞の直接目的語に前置されて進行・継続相を表す現象である。

本発表では, この用法を *fii- / f-* のアスペクト的用法と呼び, チュニス方言, あるいは近隣方言における先行研究を踏まえた上で, 具体例をもとにその統語的特徴をまとめた。そして, この要素が意味的には動詞アスペクトに関わるものの, 統語的には名詞に接辞されている, すなわち前置詞の特徴を保持し

ており、動詞接尾辞とは解釈できない、と分析した。さらに、その出現環境に関して、進行・継続相という意味的観点から説明可能なものと、そうでないものがあることも指摘した。

最後に、この現象が場所格が文法化して動詞アスペクト表示となるという他言語でも見られる現象とも関わることに触れた上で、上記の分析の結果からこの現象も文法化のひとつと見なせると結論づけた。

## ベトナム語の認識動詞

山崎 雅人

ベトナム語で「分かる・知る」などの認識行為を意味する動詞の素性配合を、**hiều** : [+意図性 +持続性], **nhận thấy** : [+意図性 -持続性], **biết** : [-意図性 +持続性], **cảm thấy** : [-意図性 -持続性]と想定することで、認識様態におけるそれぞれの意味を表現できると考える。例：Anh phải bắt anh ta **hiểu** rõ ràng ở điểm này. (この点を彼がはっきり**理解**するようにしなければならない), Tôi đã **nhận thấy** là anh ta không đến nữa. (私は彼がもう来ないものと**認める**), Anh Nakayama **biết** rất rõ về lịch sử khu vực Trung Đông. (中山さんは中東の歴史についてよく**知っている**), Tôi **cảm thấy** anh ấy đang thất vọng. (私は彼が失望していると**分かった**)

## 日タイ両語のアスペクト形式について—「タ」と「leew」を中心に—

ラッタナセリーウォンセンティアン

本発表では、事態把握と述語の語彙的意味の観点から「タ」と「leew」を一つの意味へと収れんさせることを試みる。日本語話者はいつも当事者のように事態を把握し、発話時に存在している事態の「タ」は、述語に内在する意味、いわゆる開始・終結点の有無によって「タ」の多義性が生じる。発話時に存在していない事態の「タ」は「想起・仮想」だと解釈できる。しかし、いずれも「タ」は「ある事態 C1 から、発話時 S に新たな事態 C2 が発生する (C1 < C2 = S)」という意味にまとめられる。一方、タイ語話者は、いつも第 3 者のように事態を把握し、「leew」はテンスに関係なく使用できる。述語の意味によって「leew」の多義性が生じるが、「ある事態 C1 が終わった後に新たな事態 C2 に変化する (C1 ][C2)」という意味に収れんされ得る。本発表では、最後に、「タ」と「leew」の重なっている使い方と異なる使い方についても論じる。

## ハワイ語における機能語‘ana の役割に関する考察

岩崎 加奈絵

ハワイ語の語 ‘ana は従来、名詞化辞と記述されてきたが、省略可能であるとの指摘をはじめ、問題を含む。この点について 20 世紀初頭の使用例から、当時の ‘ana の機能について再考した。結果は以下の通り。

- ・‘anaの有無に関わらず、前部要素（冠詞、指示詞など）が伴えば、動作を表す内容語が行為名詞句として働くので、内容語を名詞句として働かせるのは前部要素と考える。
- ・‘anaを含む句は、「実現した／する見通しの動作」について使用される。  
また、‘anaを含む句は「動作そのもの（～すること）」のみ示すため意味予測が可能であるが、‘anaの無い行為名詞句は「動作またはそれに関連するモノ（話す→言葉／話すこと、等）」と意味範囲が広い。
- ・以上より、‘anaは先行する内容語が「動作そのものを示す」ということを明示・強調する機能を持ち、その結果、‘anaの無い場合に存する、動作に関係するモノという可能性を消し、話者の解釈の負荷を減らす役割を果していたと考える。

## ペルシャ語児の使役動詞の獲得における「描写的ジェスチャー/擬態語」と「動性、瞬時性、有限性」に基づく「使役」概念のカテゴリー化

ギアーイー・レイラー

本稿では、ペルシャ語児による使役動詞の獲得を、CHILDESのペルシャ語児5人と横断的実験対象98人の使役動詞の発話パターンの分析に基づいて行う。主要な論点は(i)ペルシャ語児は動詞獲得の初期段階において、大人の話す母語にない擬態語を創造する、(ii)使役動詞の獲得は、幼児が観察する事象に関わるアスペクト素性に基づいてカテゴリー化される、の2点である。大人が子供を相手に話すときに擬態語を多用しなくても、擬態語には動詞の獲得を助ける力がある。幼児は使役移動の動性、瞬時性、限界性(=DPT属性)に基づいて、全ての動詞をVendlerの4種類の語彙アスペクトに相当するカテゴリーへと分類していく。初期段階では語彙アスペクトに基づいてカテゴリー化するが、競合する動詞に接すると、自分の作ったカテゴリーに様々な制約を与えることを学習し、徐々に過剰一般化も減少し、やがて無くなる。

## 《ポスター発表 Poster Presentations》

### 街のなりたちと言語景観—東京・秋葉原を例として—

田中 ゆかり, 富田 悠, 早川 洋平, 林 直樹

東京・秋葉原駅界隈の言語景観について、2010年春に行なった店舗掲示類調査と、同年冬に行なった店舗の運営するweb調査ならびに店舗掲示類の追加調査に基づいた報告を行なう。秋葉原駅界隈は、電気街としてよく知られるのと同時に、近年ではサブカルチャーの街としても知られ、外国人観光客からも人気の高いエリアである。このようなことから、外国人観光客目当ての多言語化が他地域に比べ進んでいると推測される。加えて、街のなりたちを示す2つの層が言語景観に反映されている可能性ももつ。全国で進行中の公的ガイドラインに基づく多言語表示の“標準タイプ[日英中韓+ピクトグラム]”化との対比、調査項目による違いも視野に入れ、秋葉原界隈の言語景観についての報告を試みる。

全体的な傾向として、使用言語の観点から街のなりたちと並行的な2層が確認され、同時に、“標準タイプ”とは異なる独特の言語選択が行なわれていることも確認された。

## 新聞コーパスにおける「二字漢語+する」の文法形式の選択傾向について

田辺 和子, 中條 清美, 船戸 はるな

本研究は、報道文においては「二字漢語+する」動詞それぞれが、かなり固定化されたヴォイス、テンス、アスペクトの形式を採るのではないかという仮説のもとに、語彙文法論の立場から、新聞コーパスを用いて「二字漢語+する」動詞の用法を分析する。

「新聞コーパス」には、日英新聞記事対応付けデータ（内山・井佐原,2003）の日本語部分を用いた。このコーパスを用いて、273語の二字漢語が「する」と接続して動詞として使われた場合のヴォイス別、テンス・アスペクト別の総合使用数に対する頻度を算出した。

その結果、「され」と接続しやすい動詞は「施行する(87.4%)」、「させ」と接続しやすい動詞は「充実する(56.4%)」、「する」と接続しやすい動詞は「防止する(100%)」、「した」と接続しやすい動詞は「独立する(68.7%)」であることがわかった。

---

### 《ワークショップ1 Workshop 1》

## ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味論と構文論

企画・司会 江畑 冬生

ユーラシア北東部には、「持っている」を表す動詞表現を欠く代わりに所有物名詞に接辞を付加することで所有を表現する言語がある。これら諸言語における当該の接辞は名詞に付加することで主に連体修飾・叙述の機能を与えるため、「形容詞」派生接辞として形態論の中で扱われてきた。しかしながら以下に挙げる特徴から、この接辞を意味や構文の面からも積極的に考察すべきである。(1) 語よりも大きい要素（句など）を入力とする点、(2) 名詞句や副詞句としても用いられる点、(3) 表す意味が単なる所有に限られず、属性、随伴者、存在などを表すことがある点。本ワークショップでは、同地域に分布し系統の異なるユカギール語、エウエン語、アリュートル語、サハ語の実例から所有を表す接辞の形態法、統語法および表す意味の多様性を紹介し、当該の形式を形態論の中だけで扱うことの問題点を指摘しつつ、存在文や共格構文と対比させながらその特徴を論じる。

## コリマ・ユカギール語の所有を表す接尾辞 *-n'e/-n'*

長崎 郁

コリマ・ユカギール語の所有を表す接尾辞 *-n'e/-n'* は、出名動詞を派生する接尾辞の一つとして位置づけられるが、句（連体修飾要素を伴った名詞）に付加できるという点で他の派生接尾辞に比して特異である。所有構文は意味の面に着目すると、(1) 存在を表すことがある、(2) 所有物が譲渡不可能な場合、連体修飾要素を伴うことが多いが、名詞によってはそれが無くとも所有物の豊富さや程度の大きさといった特異性が含意される、(3) 所有物が譲渡可能な場合は、単に「所有していること」を表すだけでなく、現に所持していることを表すことがある、といった特徴を持つ。また、情報構造の面から見ると、(A) 所有者（主語）が主題である場合に用いられることが多い、(B) 疑問詞を用いて所有者の数や種類を問うことは可能だが、所有者の内容そのものを情報として要求することはできない可能性がある、という点が指摘できる。

## エウエン語の所有を表す接尾辞 *-lkAn*

鍛治 広真

エウエン語の接尾辞 *-lkAn* は、名詞語幹に付加されることによって所有の意味を表す。連体修飾用法、叙述用法に加えて随伴の意味を表す副詞用法を持つ。接尾辞 *-lkAn* は普通名詞に付加され所有を表す用法を中心とするが、普通名詞以外に付加すると次のような用法の広がりを持つ。(1) 人称代名詞・固有名詞に付加され随伴者を表す。(2) 衣類・携帯品を表す名詞に付加され、着用・使用中であることを表す。(3) 容器を表す語に付加され単位量を表す。(4) 数詞に付加され年齢を表す。また接尾辞 *-lkAn* と対をなす形式として、欠如を表す *aač -LA* 構文がある。*aač -LA* 構文は、欠如、非所有、非随伴の意味を表し、接尾辞 *-lkAn* の機能とは対称的な意味を持つ。一方、形態統語的な観点から見ると、非随伴を表す副詞句用法において *aač -LA* 構文には具格接辞が必須であるなど接尾辞 *-lkAn* とは非対称な点も見られる。

## アリュートル語の所有を表す2つの接辞

永山 ゆかり

アリュートル語(古アジア諸語)には所有物をあらわす名詞について所有をあらわす接辞が2つある。それぞれの接辞がついた形式の位置づけは同一ではない。一方は格接尾辞をとり単独で文の主語や目的語になることから名詞として位置づけられるが、所有者をあらわす名詞と並置されてそれを修飾できるという点で普通名詞とは異なる。もう一方は共格や副動詞と同一の接頭辞に所有者の人称と数をあらわす接尾辞が組み合わされたもので、伝統的に形容詞として位置づけられてきたが、連体修飾的な用法を許さず、主に叙述的にもちいられるという点で形容詞とは異なる。意味の面では、前者は主に所有物を現に所持していることをあらわすが、所有物の種類によっては「位置する」「着ている」「乗っている」など所有以外の一体性の強い関係をあらわす。後者は所有、存在、所有物の豊富さなどをあらわす。

## サハ語の所有を表す接尾辞 -LEEX

江畑 冬生

サハ語の所有を表す接尾辞-LEEX は伝統的には形容詞派生接辞とされてきたが、この記述には次の 2 つの問題がある。(1) 接尾辞-LEEX が句を入力とするだけでなく複数接辞にも後続すること。(2) 接辞の付加した形式が名詞句または副詞句としても機能すること。意味の上では、接尾辞-LEEX は単なる所有を表す以外にも、それを着用中または使用中であることや一時的性質ないし恒常的性質を表すことがある他、等位構造を構成したり、近似複数を表すなど幅広く用いられる。最も特徴的なのは文末に現れる場合である。文末では、接尾辞-LEEX の接辞の付加した名詞が、ある事象に対する判断や思考等の内容を表すのに用いられることがある。接尾辞-LEEX が形動詞に付加された形式が文末に現れる場合には、経験または義務を表すようになる。そのため、形式上は名詞述語文でありながら、形動詞に付加された接尾辞-LEEX があたかもアスペクト接辞またはモダリティ接辞であるかのように働く。

### 《ワークショップ 2 Workshop 2》

#### 名詞との結合による複雑述語の形成—その制約とメカニズムについて—

企画者・司会 由本 陽子

複合動詞や複雑述語の形成については、統語的分析、語彙意味論的分析、いずれも多く先行研究があるが、本ワークショップでは、動詞・形容詞が名詞や不変化詞と結合する複合をとりあげ、その形成メカニズムと意味的・統語的制約を中心に考察する。具体的には、日本語の複合形容詞(岸本)、複合動詞(由本)とスウェーデン語の不変化詞動詞(當野)をとりあげ、造語された述語の統語的・意味的性質がいかに関係決定されるかについても明らかにすることをめざす。具体的な分析には、編入という統語的な述語形成の操作、および、項構造と概念構造(LCS)、さらには特質構造などの語彙意味表示の体系を用いることになる。各発表に共通の結論として、複雑述語形成には、意味構造と形態統語構造それぞれに自律した多様なプロセスがあることを認める立場の妥当性を支持することになる。

#### 「名詞+ない」の形態を持つ複合形容詞

岸本 秀樹

日本語には、「名詞+形容詞」の形態を持つ複合形容詞が数多く存在する。その中でも否定の形容詞「ない」と名詞が共起するタイプの中には「たわいない/たわいがない」「申し訳ない/申し訳がない」「だらしがない/だらしがない」のように、「が」格が名詞部に随意的に現れるものが少なからず存在する。このような形態的な事実は、複合形容詞が節の構造から名詞を編入することによって形成されるということを示唆するが、本発表では、このような複合形容詞が実際に名詞編入前の構成的な構造および

名詞編入後の語彙的な構造の両方を参照する制限を持つことを示し、編入による形容詞形成の説明の妥当性を検証することができることを論じる。

## 「名詞+動詞」型の複合語形成と意味構造における項の語彙的束縛

由本 陽子

本発表の目的は、日本語の動詞とその内項を結合した複合語が(1),(2)のように「する」と結合して、あるいは(3)のようにそのままの形で述語として機能するための条件を名詞の特質構造を用いて説明することである。

(1) ランク付け, パック詰め, 仲間入り, 親離れ。(野菜をパック詰めする)

(2) 値上げ, 幅詰め, 灰汁抜き, 気疲れ。(卵を値上げする)

(3) 色づく, 活気づく, 波立つ, 毛羽立つ, 芽吹く, 縁取る。

それぞれ形成メカニズムは異なるが、いずれも動詞の LCS を受け継ぎながら、もとの動詞とは異なる事態の捉え方を表し、その形成の動機づけには構文交替との共通点が見出せる (cf. Yumoto (2010))。また、結合する動詞の LCS には結合する名詞の特質構造内に含まれる項によって語彙的束縛を受ける項が含まれている。以上のことから、項構造や LCS 以外に特質構造も語形成に重要な役割を果たすことが明らかになる。

## スウェーデン語の不変変化動詞と意味構造における編入

當野 能之

スウェーデン語には他のゲルマン系の言語と同様に *kasta ut* (throw out) のような不変変化動詞 (句動詞, 分離動詞) が存在する。本発表では、不変変化詞と動詞が統語構造においては一語を成してはいないが、意味構造において不変変化詞が動詞に編入を起し、一語を形成していることを主張する。具体的には、以下の(1),(2)のタイプの複合動詞と不変変化詞との共起関係を観察し、不変変化詞が付加詞として編入していることを示す。

(1) *damm-suga* (dust-vacuum) のような項の関係にある名詞を含んだ複合動詞

(2) *kniv-hugga* (knife-cut) のような付加詞の関係にある要素を含んだ複合動詞

さらに、不変変化動詞と同じアクセントパターンを取ることから、従来スウェーデン語文法の中で同じ扱いを受けることが多かった *köra bil* (drive car) のような「動詞+無冠詞名詞」の組み合わせが、意味構造において項として編入しているということを主張する。